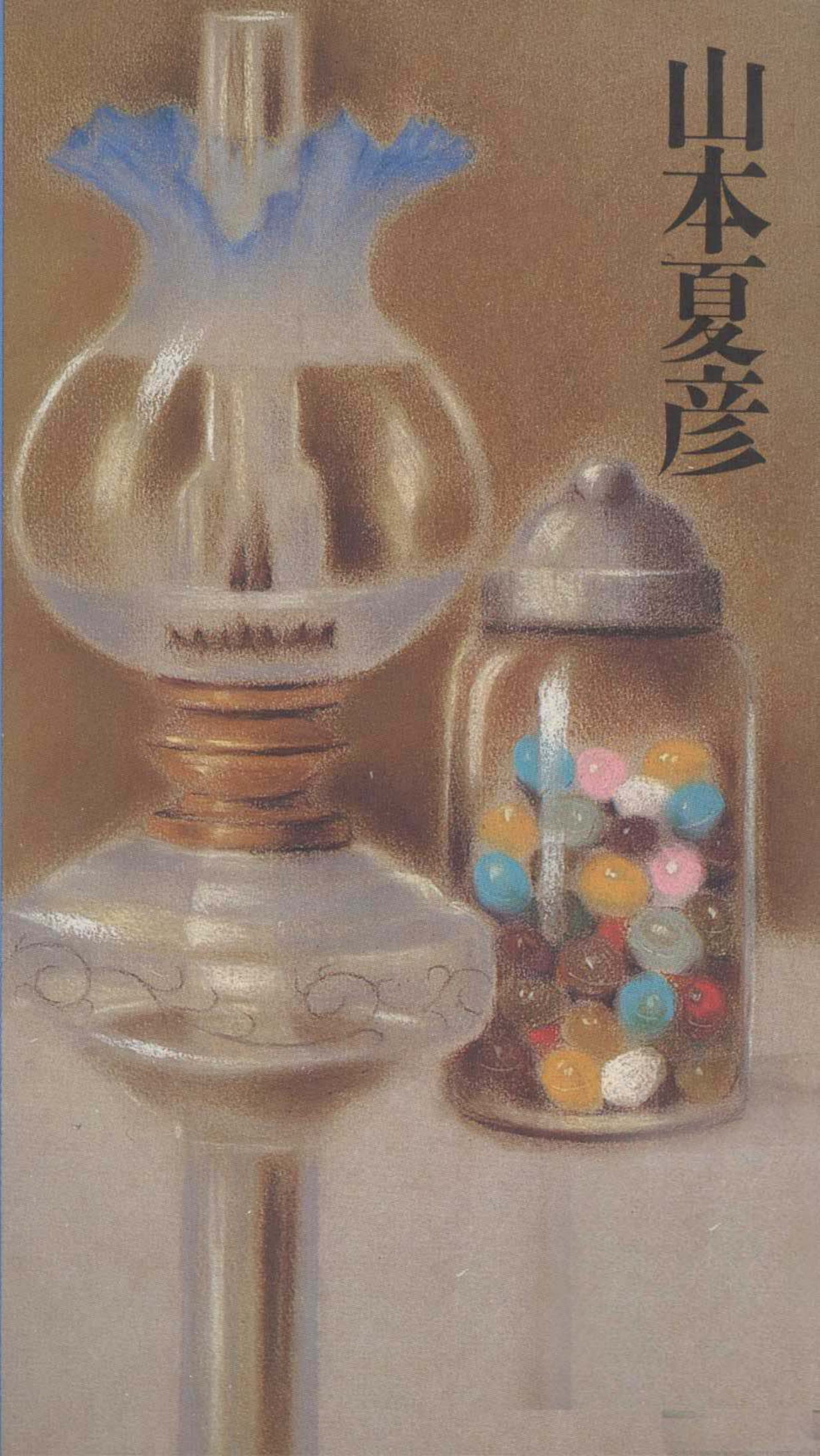
二流の愉しみ

山本夏彦



二流の愉しみ
山本夏彦
© Natsuhiko Yamamoto 1984

講談社文庫
定価400円

昭和59年4月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
振替 東京8-3930
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国オフセット株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。 (庫二)

ISBN4-06-131789-X (0)

講談社文庫

二流の愉しみ

山本夏彦

はしがき

恋と幽霊のうわさはずいぶん聞くが、実物は絶えて見ないと古人は言っている。つい戦前まで恋愛による結婚は親たちに喜ばれなかった。見合による結婚のほうが喜ばれたから、娘たちの多くはそれに従って、生涯恋をしないで終るものが多かった。

ところが、戦後は恋し恋されて一緒になるのが普通になった。それと聞いて争ってする恋なら、たぶん本当の恋ではないだろう。さりとて本当の恋があること希なら、これを本ものだと思うよりほかない。

我も人も皆にせ物を本ものと思ってその一生を終ることを、アメリカとわが国のプロ野球をたとえに、かれが本ものならわれはにせ物で、それと知りつつわが野球ファンが熱中する熱中とはそもそも何かと、私は「二流の愉しみ」と題して書いた。

それを本書中に入れるつもりでいたところ、出来栄が気にいらなくて省いた。省いて「当人論」と改めるつもりでいたところ、当人論では意味がよく分らぬと言われたので、他に適当な題がないままこの題だけ残した。二流の愉しみとは何かと怪しむ人があるだろ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

うと、その由来を述べると右の如くである。

今回のこの集は、「室内」と二、三の新聞に書いた短文をそのⅠに、「小説新潮」「週刊文春」に書いたコラム少々をそのⅡに、「中央公論」「文藝春秋」その他に書いた私としてはやや長めのものをそのⅢに納めて特に編集しなかった。

雑誌によっておのずと題のつけかたが違うが、またコラムはニュースを扱っているが、中身はニュースと関係ないから、これもそのままにした。どこからお読み下さるのもご勝手だが、「当人論」はご覧いただきたいと作者は願っている。

昭和五十三年秋

目次

はしがき

I

私の文章作法　13
ラジオぎらい　20
相性　26
もといた家　32
一文なし　39
物くれる人　45
内と外　51
かぎ　58
家計簿　64

旅 70
浮気 76
デノミ 82
求人難 88
婦人の正義 94
ハーフ 100
紙入れ 106
ごてる 112
賞与 118
編集者三十歳定年説 124

II

マイホーム残酷物語 133
税金はくれてやるもの 139

泥縄のすすめ　144
悪いのはいつも他人　149
洗剤騒ぎを回顧する　155
文句言うならそのとき言え　160
偽善は常に正義を装う　166
ないものに注目する　171
株屋のまねを法人がする　176
人はどこまで無実か　182
下男の星主人の星　188
ある芸人の死をいたむ　193
ヤンマー対日立戦を見る　199
旗なし旗日三十年　205
「もんぺの春」は暗かったか

Ⅲ

紋切型のすすめ 217
微妙なものの喪失 229
「水無飴」始末記 241
沖縄どこ吹く風 252
当人論 268

勁直と抒情　向井　敏 281

二流の愉しみ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I

私の文章作法

手紙の書き方、文章の書き方というたぐいの本を、私はさがしている。良書があったら教えてくれとひとにも頼んでいる。

このたぐいの本を出す版元には、赤本屋が多い。ちゃんとした本屋は、どういうわけか出さない。むかしは出したが出さない。

一葉女史の「通俗書簡文」は、博文館から出た。博文館は今でこそ博文館日記にその名をとどめるだけだが、明治大正時代は一流の本屋だった。それが手紙の書き方やら料理の本まで出している。面白がって私が何度か引用した「仕出しいらず女房の機転」（一名「和漢洋料理案内」自在亭主人著）という惣菜料理の本は、明治二十七年三月博文館発行である。

一葉女史の手紙の書き方は名著である。これについてはすでに書いた。けれどもあれは候文（そうろうぶん）で、巻紙に筆で書いた時代の文章だから、今の少年少女に推薦しても読まない。読まないものを

推薦しても仕方がない。

私が弱年のころ読んだものに、谷崎潤一郎の「文章読本」がある。これも名著である。縮刷版が今も中央公論社から出ている。私は十何冊かまとめて買って、わが社の老若の社員に読ませたことがある。読ませてもむだですよ、と十年も前のあるとき知りあいの画家に言われた。谷崎の文章読本は、昭和九年の出版である。戦前のものではあるが、今読んでも古いということがない。むずかしいということがない。説いて委曲を尽し、この種の本でこれ以上のものはない。

それを読ませてもむだだと言われて、私はびっくりした。実は私もむだだろうと思っていたからである。

本というものは、自分で買うものである。いくら良書でも、読めと与えられたら、薬くさくなる。せっかくの本がつまらなくなる。したがって、私は本を与えることに不賛成である。不賛成のくせに、与えるのはおかしいといわれても困る。手紙や報告書の書き方を知るのは、目下の急務である。ながく待つわけにはいかないから、良書があれば与える。薬くさくなっても仕方がない。面白くなくなっても仕方がない。自分で買えば半分は身につくのに、四半分しか身につかなくても仕方がない。

旧知の画家が、むだだと言ったのは、これとは違った意味だろう。どうしてむだかそのうち聞いてみようと思いながら、久しく会わないのでそのままになっている。

戦後の本に、清水幾太郎の「論文の書き方」がある。清水幾太郎はながく学習院大学で教えた

人である。戦後の大学生をよく知る人である。彼はこの本を学生に買わせたという。一々教える煩にたえないから、これを読ませ、最低のことを心得させ、その上で話をすすめようとしたのだろう。この本は岩波新書の一冊である。

谷崎が旧式なら、この新式を加えて私は二冊一組にして与えたことがある。どちらでも気に入った方で学んでくれ。

「論文の書き方」は、新聞の文章の非難に終始した本だと記憶している。私の記憶は怪しいから、間違っていたらご勘弁願うが、新聞の文章は悪文の見本だと、徹頭徹尾攻撃して、それがおのずと論文の書き方になっているという独得な本だったかとおぼえている。

このごろの学生はものを知らない、文章の行を改めたら、一字分下げて書くことさえ知らないと、中学だか高校の教師が、なげいているのを読んでかえって私は驚いたことがある。

改行のつど一字下げるのは、活版屋の便利のためである。活字にする文章なら、ここで改行せよというしるしに、一字下げたほうがよかろうが、小学生や中学生の綴方はだれも活字にしない。いわんや手紙は印刷に付さない。それなのに改行するたびに一字下げよと、小学中学では教えているらしい。一字下げどころか手紙に句読点はいらないと、いつぞや私はうっかり教えて後悔した。なぜ句読点がいらないか、それを説明するのに手間がかかるからである。相手は学校で一字下げよと教わってきている者どもである。

清水教授は自分の本を持たせて、その上で話をすすめた。私は他人の本を読ませて、その上

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com